

【分科会6】 アンチスティグマとリカバリー

司会: 高橋清久 (財団法人精神・神経科学振興財団)

シンポジスト: 「アンチスティグマに関する報道の責任と役割」 寺尾直宏 (NPO法人千葉県精神障害者家族会連合会)

「アンチスティグマと精神保健に関する教育問題」 石山勲 (セルフヘルプグループ みつば会)

「アンチスティグマとテレビ ～制作者の体験から～」 井筒屋勝己 (NHKディレクター)

「アンチスティグマとメディアの役割」 原昌平 (読売新聞大阪本社編集委員)

80名ちょっとの参加者でした。大ホールですので聴衆は余計まばらに見えました。でも、シンポジストの皆さんは大変熱のこもった講演をされ、演者間の激しい議論もあり、聴衆からも熱心な質問がだされ、充実したシンポジウムとなりました。

最初の演者の寺尾さんは、ライシャワー事件を報じた新聞の切り抜きやその他多くの資料をまとめられ、聴衆にも配布しました。これを例にして新聞の報道の仕方に偏りがあること、それは改善されつつもいまだ尾を引いていることを強調しました。さらにこのような影響力のある新聞が正しい知識の普及に力を入れれば、偏見の問題も大きく改善されるだろうとの期待を述べました。

二番目の演者である当事者の石山さんは、かつて書かれた「幽閉」という自己体験を基にした小説の紹介、さらに当事者のための手引書「精神保健・医療・福祉の正しい理解のために」を書かれた意図などを話されながら、我が国の精神保健福祉が持つ多くの問題点を指摘し、その改善を訴えました。

三番目はNHKのTVディレクターの井筒屋さんで、30年以上のお仕事を振り返り、様々なエピソードを交えながら、障害者福祉への取り組みを紹介しました。実名で番組に出演してくれる当事者の出現に感銘をうけたことや、最近の元気のよい当事者との出会いなども話された。今後の課題は一般市民が関心を持ってみてくれるような障害者関係の番組を作ることと話を結びました。

最後の演者の原さんは精神障害者に対する偏見が生まれた理由として、1. 隔離収容主義、2. 一般市民との接触減少、3. 行政による差別、4. 教育、5. 報道の在り方をあげました。

今後、メディアとしては、1. 地域で暮らす精神障害者の日常生活、人間としてのリアルな姿を伝える、2. 気持ちを動かすことが重要、3. 気持ちを動かすのは「人間の物語」である、4. 同じ立場に身を置いた「共感」であると熱弁をふるわれました。

当事者や家族にとって、偏見は障害よりもつらいものだといわれます。

「アンチスティグマとリカバリーは車の両輪」という言葉が一昨年このシンポジウムで生まれましたが、偏見を少しでもなくすためリカバリー力をたかめる必要があることを感じさせられたシンポジウムでした。